
切り裂きジャックは殺しません!裏面?

和呼之巳夜己

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

切り裂きジャックは殺しません！裏面？

【Nコード】

N7964E

【作者名】

和呼之巳夜己

【あらすじ】

本編に関係があるような無いような人物を中心にピックアップして出来る外伝登場！！！！

桐原須藤主役の短編、さらに切り裂きジャックたちのサイドストーリーまでも網羅している気分の切り裂きジャック裏面版チョコチョコ更新で登場！！！死闘を繰り広げた強敵、どうでもいいサブキャラまでもが総出演確約の裏面、出現！

BLACK / IN / THE / SKY (前書き)

八迫は、桐原須藤戦が終わったあと、ふと思い出す。あいつとの腐れ縁はどこから始まったのか。そして記憶をたどる八迫と対に孤高の天才桐原須藤の思考も混ざる切り裂きジャックは殺しません！初のが遺伝シリーズ第一章を飾るのはこれだ！

BLACK / IN / THE / SKY

第一章 RED・BLACK

壱 DARK / IN / THE / SKY

何年か前。俺が須藤と出会ったのはいつ頃だろうか。そっだ。入学式の時。

八迫は日記を読み返し、思い出した。

幼少時切り裂きジャック予備校にて

教室で一人ぼつんと座っている子を見た。八迫は友達になろうとその子の机に向かった。

「ねえ。君なんて言うの？ 僕、栗柄八迫^{くりがらやない}。よろしくね。」

握手をしようとした手を、その子は握り返してはくれなかった。

「ぼ・・僕・・桐原・・須藤。よろしく。」

まだ恥ずかしいらしく、桐原須藤と名乗った少年は、もじもじとしながら答えてくれた。

「ねえ。一緒に遊ぼうよ。」

八迫が話しかける。

「で・・でももう授業が・・始まっちゃうよ。」

須藤が行った通り、言い終わった次の瞬間、チャイムが鳴り響いた。

「ちえー。じゃ、また後でね。」

八迫はそのまま、自分の席にも出っで行った。

須藤はにつこりしてつぶやいた。

「僕の・・友達。」

こうして栗柄八迫と桐原須藤の親友関係は出来た。

毎時間、終わるたんびに八迫は須藤の席に来てくれた。そしてたわ

いもない話・・・普通に友達としゃべることと変わらないことをしやべった。たまに、八迫の提案で外で遊ぶこともあったけれど。

そうやって毎日のほとんど過ごしているうちに落第試験が始まった。落第試験とは、これまでの授業をいかに理解しているかを調べる試験で、これで五十点は取っておかないと、即落第だった。試験の結果は三日後に、教師によって告げられた。

「まず、学年一位は、このクラスにいます。桐原須藤。満点。」
クラス全員から拍手喝采を浴びる須藤はどこか照れくさく、苦笑いしていた。

「栗柄八迫 八十七点」

この結果を聞いた八迫は眉間にしわを寄せ、唸った。

「うーーーーーぬうううう。」

八迫が唸っているのを須藤はみて、いや、全員が何でそんな真剣な顔や、不安な顔になっているのか、須藤は分からなかった。自分が賢いんだということも何も・・・。

BLACK / IN / THE / SKY (後書き)

八迫は一度閉じた日記の次のページを開く。そこにかかれていたことは、初の喧嘩だった・・・？

RED / OUT / THE / BLACK SKY (前書き)

栗柄八迫は、桐原須藤の切り裂きジャックを抜けるのを阻止しようとしていた。亮祐は、一足先に来ていたが、須藤を止めることは出来なかった。残る術はただ一つ。栗柄八迫が桐原須藤を止めることのみ……。

桐原須藤を、八迫は止めることが出来るのか？

切り裂きジャック番外編、第二話は須藤のジャック抜け！

RED / OUT / THE / BLACK SKY

RED / OUT / THE / BLACK SKY

屋根の上、八迫は、須藤の前にいた。

「何でなんだよ！何で町をこんな目に。今すぐ止めるよ。」

須藤は笑って答えた。

「ははは。僕はこのジャックが不良品だったことに腹を立てているんだよ。つまり、これを作りよりによって僕に渡した協会を・・・町を。」

そう言いながら須藤の目は笑っていなかった。

「ねえ八迫。何で君のジャックは活きているの！僕ではなく、君のがっ！」

そこには憎悪に煮え返る須藤の顔があった。八迫はその顔を直視できな

「それ・・・は・・・」

須藤は空に視線を変えてしゃべりだした。

「僕は切り裂きジャックの試験、全部一番だったんだよ？それが途中で君たちが這い出てくるから・・・。だから僕に不良品がわたったんだ。だから僕は、君たちも恨む。栗柄八迫と、中片亮祐の二人もっ。」

須藤は八迫の後ろでボロボロになった亮祐を指さしていった。

「八迫。君も直ぐに病院送りにして上げる。僕と君の差を見せつけてあげるよ。」

八迫はやつとの思いで口を開いた。

「逆恨みじゃねえかよ。」

須藤は八迫の顔面に思いつきり拳をたたき込むと答えた。

「ああそうさ。逆恨みさ。でもその逆恨みで俺はこの町を燃やしているんだ。ふふうふふ。」

八迫が屋根の上を飛んでいった。亮祐の真上を。亮祐はさつきから立とうとしているが、たてないままだった。八迫はふらつく足で須藤の元へと言った。自分だけが須藤を捕まえられると信じて。

「須藤っ！やめろおおおおおお。」

八迫は拳を付くって須藤に向かっていった……。

「八迫。貴様も出番は終わったんだよ。亮祐とともに。」

須藤は特殊能力を使って八迫を襲おうとかまえた。

「これで幕を下ろそう。栗柄八迫。我が親友。カルボーン・エカスタン！」

辺りは光で包まれた。亮祐は屋根で横たわっていて、八迫も、また屋根で横たわっていた。

須藤は八迫の横で立っていた。右腕は肘から先がボロボロで、傷だらけだった。八迫の真横には、須藤の血だまりがあり、八迫の髪をもうすぐで真紅に染まられそうなほど直ぐ近くに流れ出ていた。

「中片亮祐、栗柄八迫……。」

そうつぶやいた須藤は奇跡的に無傷な左手でズボンのポケットから生徒証明書落了した。

「開け、霊道。」

須藤は道を造ると切り裂きジャック予備校地区の一つの屋根から姿を消し、切り裂きジャックからも、抜けた………。このことを中片亮祐は知らない。

次の日の新聞は切り裂きジャック予備校半壊！犯人は孤高の天才桐原須藤？

元切り裂きジャック桐原須藤は、闇へと消えた。

八迫は病院で、相部屋の亮祐に言うのではなく、誰にでもなく、つぶ

やいた。

「須藤……。」

亮祐は、それを偶然聞いてしまった。

「栗柄八迫、中片亮祐……僕はお前ら二人を許さない。僕はお前らを殺す……。」

闇の縁で休養中の桐原須藤は、瞳を閉じて、つぶやいた。

RED / OUT / THE / BLACK SKY (後書き)

次回は桐原須藤、切り裂きジャックから抜けた心境を綴る・・・。

SKY/DIVE/IN/UNDERSTAND (前書き)

満月の深夜、異なる場所で、三人の人間が同じ行動をした。

SKY/DIVE/IN/UNDERSTAND

SKY・DIVE・IN・UNDERSTAND

桐原須藤は、満月の光を浴びて、考える。自分が切り裂きジャックを抜けてからのことを。あれから八迫は、竜太という伝説の切り裂きジャックかもしれない奴を連れてきた。名刀の中の名刀をもこえるという、龍魂剣までもって。

「そこまでして、僕を救いたいのか？きみは。」

栗柄八迫は、満月の光を浴びて、考える。須藤が切り裂きジャックから抜けてのことを。あれから須藤は、闇に手を染めた。自分や、亮祐には手出しが出来ないところにいるのかもしれない。それでも・・・。

「そこまでして、闇から身を引かないのか？おまえは。」

異なる場所で、二人の人間は同じ行動をした。自分の左胸を押さえ、下を向いたのだ。

そして、

「もし、まだ向かってくるならこれを使わなければいけないかもしれない。」

異なる場所で、二人の行動は、つながっているかのように同じだった。

異なる場所で、同じ行動をするものは、さらに一人増えた。

「八迫。お前はどこからどこまで知っているんだ・・・。そして須藤。俺達は・・・そんな関係だったのか？」

中片亮祐は上を向いて、つぶやく。

異なる場所で、三人の人間は同じ行動をした。右手で、目を覆って視界に何も映らなくしたのだ。そして、
「どこまでが本当なんだ？」

異なる場所で、三人の行動は、つながっているかのように同じだった。

そして、ここで、三人は、全く違うことを一度だけした。

「八迫、亮祐。」

「須藤、亮祐。」

「須藤、八迫。」

自分ではない自分の頭の中で考えている人の名前を口にした。それからまた、三人は、同じ行動をした。右手で屋根、もしくは、崖に掴まり、下のテラス、もしくは岩におりたのだ。

三人は、それぞれちがう行動をした。

須藤は、右手を上。

八迫は、左手を上。

亮祐は、両手を上。

それから三人は再び同時につぶやいた。

「我ら、永久なる親友なるものなり。この絆、なんときもたちきられん。」

それは、学校に行っていたときに決めた、印だった。

そして三人は同時に手を下げた。

「しかし我は、その絆にひびを入れてしまった。」

三人はそうつぶやくと、涙を拭った。

異なる場所で、三人の人間が、同時に一日を終了した。
明日もまた、異なる場所で、三人の人間が、同時に朝を迎えるだろ
う。

「我ら、友情永久なるものなり。」
異なる場所で、三人の人間が寝言を言った。

S K Y / D I V E / I N / U N D E R S T A N D (後書き)

三人の夢は、学生時代に留まっていた。

BLACK / OF / RED AND / BLACK (前書き)

RED・AND・BLACK}二つの色}編、ついにクライマックス！

桐原須藤と栗柄八迫の初ダンジョン、別名暗黒の谷のクエストは成功するのか？そして桐原須藤の切り裂きジャック抜けの本当の意味とは……。

BLACK / OF / RED AND / BLACK

BLACK・OF・REDOUT・BLACK

八迫は、遠い空のかなたにいるはずの須藤を思った。そして、本を開く。

それは友と友が粗そう物語だった。

八迫は途中で読むのを止めた。読まなかったのではなく、読めなかったのだ。自分と、須藤のように見えて。

須藤は、遠い空のかなたにいるはずの八迫を思った。そして、本を開く。

それは、友を殺す復讐劇の話だった。

須藤は読書が得だったので速読法をつかって十分ぐらいで読んだ。

亮祐は、趣味の料理を作っていた。悶太の誕生日だったからだ。

紙をみて、悶太から注文された料理の数々を作っていく。その姿は、様になっていた。

そんなとき、リストの中にある料理名を見つけた。

「ローストチキンのあぶり照り焼き」

それは、八迫とともに領すが、須藤が逆襲する前日に食べた物だった。

たからだ。

「須藤……。」

亮祐は、今でも信じられない。あれが本当に自分の知っている桐原須藤なのか……。

亮祐は料理を作る中で……ローストチキンのあぶり照り焼きを作る中で、考えた。自分が、八迫と、須藤に出会ったその日を。

確か、小学三年生ぐらいだったはず……。

「皆さん、こっちを向いて。今日から転校生が入ります。中片亮祐君です。」

仏頂面で、亮祐がクラスにはいる。

「中片亮祐です。」

亮祐は、入ったとたんに八迫の方に顔を向けていた。

「中片亮祐。」

「誰だ、お前。」

八迫が三白眼でにらんで答える。

「いや、お前のほうが誰だよ。」

思わずつつこんでしまった。

先生は、黒板をたたくと、黒板が半回転して裏向きになった。

「あんたら、静かにしないと、この百乱刀ひゃくらんとうで叩き斬るわよ。」

八迫をこえる三白眼で、二人をにらむ先生。

「は……はい。」

二人の息はぴったりで返事をした。

「じゃ、八迫。須藤と一緒に亮祐の面倒でもみてやってね。」

先生は、百乱刀を八迫の首筋に当てて言う。

「ふあふあふあ……ふあい……。」

首筋に冷たい物が当たった八迫は恐怖で答える。

「はい。」

さつきから本を読んでいた須藤が本に集中し、反射神経だけで答え

る。

「ばあつ・・・誰が他人の世話なんかになるかよ。」

八迫の首に付いていたはずの百乱刀はいつの間にか亮祐の首筋に早くも当てられていた。

「・・・・・・・・・・。」

先生は無言で百乱刀を当てる。

「・・・・・・・・はい・・・・・・・・。」

亮祐もまた、恐怖で答えた。

生徒の誰かが小声で隣の友達に言った。

「なあ。先生前は百乱刀じゃなくて、略乱刀りゃくらんとうだったよな・・・。」

そう言った生徒の首筋にもまた、百乱刀が当てられていた。

「プライバシィよ。プライバシィ。」

「はい。」

そう言う先生はまた、黒板の前に戻っていた。

「これで、三人はお友達ね。」

亮祐はその部分を思い出して、背後にあの先生がいたような気がして身震いした。

八迫は思った。

須藤も思った。

亮祐も思った。

「あのマティーンム先生は怖かった・・・・・・・・！」

その直後、三人の背後にまた、あの寒気と、首筋には冷たい感触があったような気がした。

BLACK / OF / RED AND / BLACK (後書き)

番外編第一部、次回完結第二部切り裂きジャックの一週間【仮】お
楽しみに

F A R S T / M I S S I O N (前書き)

これは、須藤が切り裂きジャックを抜ける直前から。そこから始まる。

FARST/MISSION

FARST/MISSION

八迫と須藤は、洞窟の入り口にたった。

「ねえ。八迫。絶対ここの伝説の秘宝、龍魂剣、龍銀剣を持ち帰ろうぜ。俺達二人で・・・な。」

八迫はエンブレムコーヒーリットルペットボトルの蓋を閉めて、答えた。

「お前が龍魂剣だからな。伝説の切り裂きジャックになれよ。」
須藤は照れ笑いをしてうなずいた。

「さ、もう行こうよ。」

二人は、暗黒の谷の中へ、足を入れた。

「汝は何のためにきた？吾は渡さない。汝等は直ちにこの暗黒の谷を立ち去れ。さもなければ、全力で、排除する。これは主の・・・シヤガンの最後の頼みである。立ち去れ。」

須藤が言う。

「僕たちは、暗黒の谷へ・・・この地に、龍の剣をもらいにきた。」
何かの声は再び脳内に話しかけてきた。

「立ち去れ。立ち去らぬと言うのなら・・・死ぬ。」

その声が終わると同時に、いないはずの者。翼竜が、おそいかかってきた。

「へんしーん。」

八迫と須藤は二人して、翼竜にかまえを取った。

「無駄だ。カオス・ファイアー。」

「八迫は右を。」

須藤はそう言って左に飛んだ。

八迫は右に飛んで、基本技を繰り出そうとした。

「カオス・ファイアー・バーニング！」

翼竜は顔の向きを変えて八迫をねらった。

「危ない、八迫！」

須藤は森で拾った枝を思いっきり投げた。八迫めがけて。

「フンニユウゲ。」

八迫は飛ばされて、炎に当たらずにすんだ。

「八迫。ダブルビームだ。」

「OK。」

八迫はビームの構えを取った。

須藤はビームの構えを取った。

「ダブルビーム！スペシャル。」

「ぐぎゃおおおおおお。おのれ。竜の剣は、決して渡さないぞ・
・。」

翼竜はそう言って消えた。

声が聞こえてきた。

「ならば、山のように出してやる。」

サイクロプスや、ミイラ等、伝説の者ばかりを出してきた。そのうちに、須藤のジャックから火花が散りだした。

「やばい。須藤、変身を止める。」

「八迫……。へんしーん。」

須藤は変身してしまった。

バチバチバチッ パンッ

凄い音を立てて、須藤のジャックは壊れてしまった。

「ぐう……。。」

須藤ははじき飛ばされ、気を失った。

「ふはははは。これで……。ぬ……。主、このものに、吾をゆだねよと。分かりました。主の言うことならば従いましょう。」

剣は、でてきた。残っていたモンスターが運んできて、須藤の前に置いた。

「吾を持ち、願いを叶えよ。」

「ふふふ。そう言うことか。行くぞ。竜魂剣。」

須藤は竜魂剣になおしてもらって目覚めていた。

「須藤・・・須藤ーーーーー！」

八迫は叫んだ。

「ふふふ。八迫。僕は素晴らしい闇の力に惚れたよ。だから僕は切り裂きジャックを抜ける。」

そう言った須藤はジャックを片手でつまんだ。

「僕には不要な物だ。」

そう言つてジャックを壁に投げた。

「僕は君を・・・殺しに行くよ。栗柄八迫。」

まるで、あの須藤は須藤でないのかと思われるほどに変わっていた。
「じゃ、バイバイ。亮祐によろしく。」

切り裂きジャック世界協会

「桐原須藤が、切り裂きジャックを抜けた。これからは、手配書に載せておけ。」

一番のお偉いさんがそう言い残して別室へと消えた。

「はっ・・・須藤は・・・須藤はどこだ・・・」

病院で目覚めた八迫は、隣でうたた寝をしている亮祐の首に手をかけて、揺らした。

「須藤はどこなんだー。」

病院に八迫の声が響いた。

F A R S T / M I S S I O N (後書き)

次回より、本編に記載の一文字悶太と中片亮祐の出会いを描く。幼少時の二人の出会いとは・・・。

壱 山道捨子ヘマウンテン・ストリートチルドレン（前書き）

今の少年と青年の関係はここから気づかれたんだ。

親がそういったとき子供は聞いた。

それからそれから？

親は笑って答えた。

彼らは有名な切り裂きジャックになって、世界を守ったんだ。

壺 山道捨子へマウンテン・ストリートチルドレン

マウンテンロード・ストリートチルドレン
壺 山道捨子

木枯らしが、その日は山を吹いていた。

そろそろ山も暗くなってきた午後五時半。

小学生の亮介は、その山道を一人、急いで上っていた。

木枯らしの音に混ざって、何かの声が聞こえた。

声といえるかもわからない、たぶん声ならすすり泣くといったような感じた。

亮介の背筋は凍った。

この山にはあれが出ると噂されていたからだ。

白いはかまを着た、青白い顔で……。

じいやからはそれが出てくるから早く帰ってこいといわれている。それは子供を……小学生をさらうといった。亮介はばっちりその条件に当てはまっている。

亮介は気のせいかな、木枯らしが声を出しているように聞こえた。

「オイデエイ・・オイデエイ・・。」

そのうえ、山はやまびこを発しその声を何十のにもだぶらせて、帰してくれた。丁寧に。

亮介は震えた。

走って山道を降りようとしたそのときだった。

かささああああああ……。

風が吹き、草が道を出した。その道には、三、四歳の子供が、うつむき、座っていた。その子供の衣服は所々破けて、肌が出されていた。しかもつぎはぎだらけの服装。

その子から声が発せられていたと、冷静な判断が出来なくなっていた良助は涙目になった。

亮介は疾風のごとく、山道を下った。

草が出した少年は、誰かいたのかと涙で赤くなった目で、音がしたほうを見たが、風が吹き終わりと、道は見えなくなった。

亮介は、屋敷でじいやに言ってみた。

じいやは笑って付いてきてくれた。

山には、誰もいないということはなく、少年が、つぎはぎだらけのぼろぼろの破れた服で、泣いていた。

亮介は、じいやに頼んで屋敷につれて帰ってもらった。

その道中、一度も少年は、口を開かなかった。
ずっと、空気を見つめていた。

「ねえ名前はなんていうの。」

亮介は亮介の同じぐらいのときに来ていた服を着たシャンプーのにおいがする少年に聞いた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・。」

少年は、空を見つめ、静かに口を開いた。

けれどその口から言葉は発せられなかった。

その頃の竜太といえば、テストの結果を見て親が頭を抱えているのだった。

壱 山道捨子へマウンテン・ストリートチルドレン（後書き）

空^{くう}を見つめた少年は、いつまでも空^{くう}を見つめていた。
それを見ていた少年もまた、同じく空^{そら}を見上げた。
少年には、少年が空^{そら}を見ているように思えたから……。。

二 亮介悶太（前書き）

少年は、空を見ないで、亮介のほうを向いた。

二 亮介悶太

二 亮介悶太 ユアンドミ

あれから二ヶ月、まだ少年は、一度も口を開こうともしない。その代わりに、亮介お坊ちゃまは、毎日熱心にあの少年の元へと、声をかけに行っている。

執事の黒坂は、毎晩、激しく暴れる、あの少年を抱きかかえ、入浴させている。お坊ちゃまに何かあつたら大変だから。清潔に洗わねばならないのだ。

「ねえ、黒坂、お父様、お母様、帰ってきたらどうしよう。」
最近、私にそういつて、おびえている事がある。

お坊ちゃまの御父母は、二人そろって別会社の社長であり、子供の事は、数年に何十回もない。けれど、御父母はそろって不潔な小動物を嫌う。彼らから見れば、あの少年は負け組みで、不衛生な動物だろう。お坊ちゃまは、過去の経験から、それをわかっているのかもしれない。

「大丈夫ですよ。まだ、連絡はありませんから。」
お坊ちゃまはにっこり、笑って少年のいる部屋へと駆け込んでいった。

「ねえねえー今日はあつたかいよ、お外で遊ぼうよ。」
ボールを持ったお坊ちゃまが部屋に入室なされた。

それでも少年は、言葉を一度も発せなかった。

それは、私は、とっさの判断をした。

もしかすると……。中片家医療班を収集した。

「あの少年はもしかすると、虐待されていた可能性があります。直ちに見てください。」

そういつた私の隣でうつむいていたじいやが、うなずいた。

「だから、話せなかったのか。」

亮介お坊ちゃまは、すぐに私たちの足元に来て、ズボンを引っ張った。

「ねえねえ・・・あのこ、どうしたの。」

心配そうに、目を潤ませて、聞いてくる。頬も、うつすらと赤みがさしている。

「大丈夫です。何でもありませんから。」

お坊ちゃまの目線で、そう答えると、

「何か、出来る事、ある？」

「・・・それじゃ、私たちと一緒に、クッキーを焼いて、あげましょう。」

亮介お坊ちゃまは、コクンと大げさにうなずくと、自室に、エプロンを取りに走り去っていった。

「やはりあのこは、虐待を受けていました。」

班長が、お坊ちゃまがいなくなったのを確認して、言った。

「治るか？」

班長は、うなずいた。

「ただ、カウンセラーが・・・。」

「亮介お坊ちゃまがいらっしゃる。大丈夫だ。」

「ねえ黒崎。まーだー。」

キッチンから、顔を出して亮介お坊ちゃまは、聞いてきた。

「えっと・・・じいさん。」

「わたしは、あの少年といえるから、お坊ちゃまを頼みましたよ。」

クッキーが、出来た。

「入ってもいいですか？」

音感のある声で、入室許可を取った。

「お坊ちゃま、どうぞ。」

あの少年の変わりに、じいやが答えてくれた。

「入ります。」

お坊ちゃまが入ると、少年はお坊ちゃまの持っている袋を見ていた。
「なあに、それ？」

それは、虐待を受けた少年が、きちんと答えた、はじめの一声だった。

これまでの少年の語りかけで、やっと、心を開いてくれたのかもしれない。

二 亮介悶太（後書き）

これからが、お坊ちやまと、少年の一步である。

三 少年悶太（前書き）

次回、亮介、悶太編クライマックス予定。

三 少年悶太

三 少年悶太

ユーネームイズモンタ

今日は、あの少年の誕生日らしい。亮介が、自分のプロフィールを明かしたと同時に少年にも聞いたからだ。

「ねえ。お名前はなんていうの」

「悶太……。一文字悶太。」

少年は……。悶太ははつきりとそう答えた。

「ハッピーバースデーテューユー」

亮介は、手拍子をしながら、悶太の為に、歌った。

「ありがとう……。」

亮介手作りの冠をかぶった悶太、頬を赤らめ、恥ずかしそうに、つぶやいた。

「ねえ悶太、これ、僕からプレゼント。」

箆笥三つ分の大きな包みが、悶太に渡された。

「????????????????????」

悶太は首をかしげた。

「あけてみてよ。」

亮介はにっこり笑うと、うれしそうに言った。

悶太は、ゆっくりとその箱をあけた。

ドサドサドサドサドサドサドサドサドサ!

悶太は、見えなくなった。

「あれ?悶太?悶太?」

亮介はプレゼントを掻き分けて、伸びている悶太を救った。

「あり……。がと……。と」

といっているのは、亮介には伝わり、とても、うれしかった。

「これ、これからここで暮らすのに必要な服とか、箆笥とか。僕の部屋の隣なんだよ。いこ。」

亮介は、悶太を何とか背負うと、部屋にかけていった。

「その荷物、持ってきて！」

背負われた悶太は、人のぬくもりを、体で感じた。

次に目覚めたとき、悶太は、自分の部屋という場所で自分だけのベッドという物で寝ていた。

悶太には、それが何か、わからなかった。

廊下に出て、自分の部屋という場所そのドアを見ると、ひらがなで、もんたのへやと、手書きで書かれていた。

悶太は、涙で、何が何だかわからなくなった。

少年は、悶太と名乗り、亮介と、親友になった。

三 少年悶太（後書き）

次回、亮介、悶太編クライマックス予定。

四 悶太亮介共同生活（前書き）

悶太編、完結

四 悶太亮介共同生活

四 悶太亮介共同生活

それから、何年かがたった。

悶太は明るい元気な少年になり、亮介は、中学校に上がった。数年たったある日、悶太は亮介の事を主人と呼ぶようになった。それから、切り裂きジャックとしての試験の日が現れた。

「んん……。」

もじもじしている悶太に、亮介は、頭をなでた。

「やれることをすればいい。頑張って、試験に挑めばいい。それで、私の部下となれる。」

悶太は小さい声でつぶやいた。

「はい。」

一度目の試験は、落ちた。

二度目は、受かった。

「良かったな。」

切り裂きジャックの受験は毎日出来る。しかも問題等はほぼ同じだ。一点足らなかった悶太はつぎの日に受けたら、合格できたという事だった。

「良かったな。」

もう一度、亮介は悶太に言った。

「ありがとうございます。」

「今宵は、合格祝いに何かほしいものはあるか。悶太」

悶太はしたを向いて、つぶやいた。けれどそれは、もらえるはずの

ないものだった。

「・・・・。」

それは、もらえるものではなかった。

「それが本当にいいのか。」

亮介は、背中を向けていった。

「今回は特別だ。次はないぞ。」

「はいつつつつ。」

亮介は、特別にほしいといったもの以外にもそれらの系統のものを買い、送った。

それらは日曜の朝七時半にやるもののグッズ、合体機械だった。

それからかなりの間、部屋で、遊ぶ悶太の姿が見られた。

歳にあった少年の姿だった。

それから、数日後、亮介の事を、悶太は亮介と呼べるようになった。

四 悶太亮介共同生活（後書き）

次回からは、何にしようかなー。

新年のご挨拶（前書き）

明けましておめでとうございます。新年二発目小説ですよー。

新年のご挨拶

新年のご挨拶

舞台の幕が上がった。

上がった底には、竜太を筆頭とする切り裂きジャックの姿があった。しかも着物での登場。

「えっと、明けましておめでとうございます。今年初のジャック番外編です。」

竜太が。

「これから僕たちは、地道に活躍できるようにがんばるよ。僕も全力でがんばります。」

悶太。

「これからががんばる、この七の貧弱切り裂きジャックをしばいていきたいと考える所存であります。」

八迫。

「そして、はやく仮面の代金編を終わらせて、新章海上舞踏会と眞石版編をはじめたいと考えております。まあ、新章がこれかはわからないけど。私はこれがいいと思ってるんだけどね。」

理緒。

「というかこれは、一体いつになったら終わるんだよ。文字数が多いと、長すぎて読まない人もいるぞ。そろそろ第二作品目に分けるのもいいんじゃないか。それにそれに、第二シーズンって一体いつまで続くんだよ。もう話数が結構言ってるじゃねえか！」

亮介。

すな．．．まだいたいことがあるのに．．．ちょ、嫌、まって．．．
．．．ああー。」

今年もよろしく、切り裂きジャック。

悶太と秘密の地下の部屋！（前書き）

これは、授業中にノートに書いたものです。

祝日のところが、運動会だった事から、そこらへんの季節かもしれ
ませんね。

数学のノートに書かれたこの短編はノート一ページだったのに改めて書くとこんなに多くなりました。これじゃ、本編一話より長いかな短いか同じくらいじゃないんですか？という自己質問に自分で答えられない私が少し恥ずかしかったりするのですが。まあ、気にしないで読んでくださいな。

ちなみに後四話ぐらい残ってますよ。数学のノートに二話。別のノートに二話。

悶太と秘密の地下の部屋！

悶太と秘密の地下の部屋！

あるところにある、切り裂きジャック本部で一人の少年悶太が決して入ってはいけなと言われている地下の部屋がありました。

ある日、とても暇だった悶太は、とても親しい亮介に聞きました。

「ねえ、何で入っちゃいけないの？」

と、そう聞きました。

けれども、そのときの亮介の答えは、

「入ってはいけないのはとっても危険だからだよ。」
という答えでした。

その後、八迫、理緒、役に立たないだろうけれど一応竜太と、聞いてみました。けれど、その答えはほぼ同じでした。

けれど、竜太からの答えは、何か裏があると思いました。

「な・・・なんにもなかったよう・・・。」

冷や汗だらだらで、竜太は答えてくれました。

そして走り去っていった後に小さな水溜りが出来ました。

それを見て、悶太は決心しました。

今日こそは入ってやると！

しかし、悶太は眠いので寝てしまうのでした。

けれども今日は違います。明日は祝日だから、遅くまで起きているのです。

昼寝もたっぷりして、夜に備え、夜に挑みました。

そして夜です。

給仕室に潜んでいた悶太は誰かが入ってくるの音を聞き、机の下に隠れました。

そして、冷蔵庫の扉が開きました。
ハム、チーズ、燻製卵が消えます。

そして、牛乳が減りました。それは八迫の牛乳でした。

「つぶはーっ！」

それは八迫の声でした。

「やっぱり、牛乳も、エンブレムだなあー。」

それを見ていた悶太が心臓が耳の穴、毛穴から、気色悪く出て行くかのように緊張しました。

見つかつてしまったら……。

そんな心配をする悶太を他所に八迫は出て行こうとして入り口で脚をとめました。

「早く寝ないと、お化けが来ちゃうかもしれない！早く寝なきゃ、怖い怖い！」

かなり棒読みでしたが、悶太にはそれだけで十分でした。

大好きな亮介の次にお化けが怖い悶太は、かなりの涙目です。

「ああれえー……オバケー。」

八迫がまるで連れ去られたかのようにふわっと消え去りました。

悶太はついに半泣きでそして亮介の部屋に向かって走り去っていきましました。

そして亮介の部屋に強引に入り込む、亮介をたたき起こして言いましました。

「亮介、一緒に寝てもいい？」

たたき起こされた亮介は寝ぼけ顔でうなずいて、枕に倒れました。

中片亮介、ついに崩御！

こうして今日も悶太は眠気と恐ろしさに負け、地下へといけなかったのです。

そして、地下室では……

「やったねえ。八迫。」

リオが燻製卵を頬張りながら微笑みます。

「良かったねえーあはははは。」

竜太が笑いました。しかし八迫は手で机を叩きました。

「そんな事はいい。とつとつこの問題を解きやがれ、こんにやろう。」

この地下は、理緒と八迫が竜太の勉強を見たり半殺しにしたりする勉強拷問室だったのでした。

まだ、決して馬鹿ではない、可能性がある悶太に、この部屋は、まだまだ早すぎる、秘密の部屋なのでした。

終わり。

悶太と秘密の地下の部屋！（後書き）

次回予告

今回は、悶太がまだ知らぬ、もう一つの部屋が地上にあった？そして亮介が、ついに逆襲に出た！

悶太は亮介の逆襲を避け、秘密の部屋について知る事が、はいることが出来るのか！
驚け！呪いの部屋！

乞うご期待！

誰かしてくださいね。

驚け！呪いの部屋！（前書き）

.....
恐ろしい話の始まりです。

総員、配置に付きました。
これで準備は万端です。

「ね、亮介ここなの？」

亮介は悶太の手を引いてP・177の部屋の前にいました。

「そうだよ、悶太。」

亮介は思わず顔がニマニマしてしまいます。それが気づかれないか、内心はらはらです。

「COME・ON COME・ON。」

八迫がジャックに通信して来ました。

「いいわよーん。」

理緒が、くぐもった声で。

「ふごつあからばさなはらでつぽーう。」

もはやいみふめいです。

亮介がドアの中に悶太を招き入れ、閉めました。

「ぎゃう！な・何するの？亮介？あつ！嫌！」

その声は後半、泣いています。

「秘密の部屋、隠された部屋なんてものはない！わかったか？」

亮介が叫びました。

亮介には見えないのにうなずいた悶太。しかし、下半身どころか全身に何かが乗っかっています。もう、なきまくりです。

中で、かなり襲われている悶太でした。

その日を境に、悶太は、秘密の部屋、隠された部屋について一切聞かなくなっただけでした。

驚け！呪いの部屋！（後書き）

次回予告！

竜太に勉強を言いつけた八迫、理緒はどこかへと消えた。後をつけ
ていくと、そこでは恐ろしい計画が、亮介含む三人によって行われ
ていた！

竜太は、その計画をとめられるのか！

躰File 竜太

乞うご期待してくださいますです。

巖File竜太（前書き）

前回より短くしました。

あと、時間軸的には短編一個目の前ですね。すいません。時間ばらばらで。許してください。

躰File竜太

躰File竜太

「おい、竜太、これやっておきなさいねえ……。」

八迫がエンブレムコーヒーを飲みつつ、山のようなドリルを竜太の目の前に置いた。

「うふえー……ん……出来ないよう!」

竜太が泣きべそをかきました。

「あそうそう、私からの贈り物。どうぞ、今から終わらせられるだけ終わらせやがれ。」

怪力の拳を作り、リオは言った。

そして、二人はどこかへ消えた。

このところ、ずっとああなのだ。

竜太は心を決めた。

今日は尾行すると。

そして、二人は、あるところにたどり着いた。

そこには、三人分の机があり、そして、書類があつた。

「では、これより、七の切り裂きジャック平田竜太の躰計画書の説明をする。」

司会の亮介の言葉で、二人は書類のページ目を開く。

「まず、一に竜太の食生活、朝食べず、昼やけ食い、夜少しに夜食山のように食べるその食生活を改善するために。です。やめさせるために縄で縛り付けます。」

二人がはいと呟く。

「次に、眠る時間が少なく寝坊してばかりの竜太のために夜十時に

は布の中に入れ暗闇に放置します。」

理緒が呟くのを、竜太は聞き逃さなかった。

「いいですねえー。」

亮介の書類を読み上げる事は終わらない。

「次に、上手に用を足せるようにマニュアルを作り……。」

「それはイラねえだろ。」

八迫は思わず突っ込んだ。

「最後に勉強させるために地下の勉強拷問室を使います。」

それが終わらぬうちに大きく反対が出ました。

「計画中止だあー。」

泣き叫ぶ竜太でした。

「実行！」

八迫が叫びます。

亮介が、多数決により決まった決定の判子を書類に押しました。

「決定につき、実行。」

竜太の恐怖はまだ終わりそうにありません。

躰File 竜太（後書き）

次回予告！！

夜、夢を見た。竜太は。それは、ベッドで隠された人一人分の穴でした。

そこに待っていたのは謎の声！
一体何なのか！

竜太と後ろの正面腐乱死体？
ゾンビーズ

竜太と後ろの正面腐乱死体（前書き）

そういえば、悶太の悶って言う字って身悶えるとかのかのときに使うやつだったんですね。知らずに名前に使っていました。変えたほうがいいのでしょうか。どうなのか、悩んでいます。

竜太と後ろの正面腐乱死体

竜太と後ろの正面腐^{ゾンビ}乱死体？

竜太はその日、夜十一時に寝ました。
すると不思議な夢を見ました。

そこは本部で割り当てられた竜太の部屋。
そこに、竜太は一人で立っていました。ふと、一週見ると、ベッドで隠された先に穴があります。人間一人分の穴です。
首を傾げた竜太はベッドをどかし、入っていました。

そこは暗闇でした。

たまに音がするだけで、後は、無の世界。
三十分は進みました。

いつの間にか、自分の入ってきた穴もわからないほどにまできてしまいました。

そして、遂に、無がなくなりました。

それは、突然現れました。

「ねえ、竜太、こっちに来てよ。」

その声に、竜太は驚き、お漏らししてしまった事は、宇宙規模での秘密です。

それはさておき、その声のほうに腹ばいで進みました。

「そっちじゃないってばあ。こっちだってばあ・・ぐひえひえ。」

その声に竜太は従いました。

「あひよ、竜太来てくれたんだ。」

暗闇から、その声の主は出てきました。

それは大きくもあり、小さくもある不思議な肉片だった。

「僕たち、仲間がほしいんだ。僕はゾンビのランケン。」

そういったランケンは竜太に噛み付こうとしました。ランケンだけではありません。そのほかの仲間たちも山のように出てきて竜太を噛み付こうとしています。

そして右手の小指を、かまれてしまいました。

竜太は絶叫して、気絶しました。

そして、竜太は現実で飛び起きました。恐る恐る小指を見ると・・・。

同時刻ー本部ー

白い実験服に身を包んだ八迫はパソコンにデータを打ち込みました。ファイルの名前は、平田竜太全実験書類そして、その右下に残り計画数。

その傍らで、エンブレムコーヒーを飲みました。

「次は、これかなあ？」

クリックボタンは、押されました。

その世、再び恐怖は舞い戻り、闇夜を引き裂くような大音量の絶叫が響くのです。

竜太と後ろの正面腐乱死体（後書き）

次回予告。

亮介は、書類整理にそれを見つけた。

それは、一人の女性がたった一人で赴いた戦争についてのレポートだった。

それを見た亮介は苦々しく思い出す……………。
あの日の、出来事を……………。

とうとうノートに書かれた短編小説最終回《今現在》！
一月一日過酷戦場報告書也

寂しいメロディーが、今、戦場に響き渡る……………。

一月一日過酷戦場報告書也（前書き）

とうとう、彼女は戦場へと旅立っていった。

二月一日過酷戰場報告書也

一月一日過酷戰場報告書也

土曜日早朝、彼女は出かけていった。

電車に乗って

船に乗って

飛行機に乗っても

正確には電車一駅分乗って彼女は、戦場へ行きました。

そして、彼女……理緒は戦場へ脚を滑り込ませました。

店が開きました。

目指すは二回の戦場でした。

並んでいる人の行く先は全員一致していました。

そして、波にさらわれるように理緒は飲まれていきました。

つめ放題の戦場です。

中ではオバちゃん**が**絶命したかのように叫び狂っています。

「ちよつとあんたーねー、その服は、あつたしがとつとたんやけどにえ．．．てえ、はなさんかいいいいいい！」

その声を聞いた理緒は戦場は後ずさりしました。

「ちょっとぎなさい……………」

! ! ! ! ! ! ! ! ! !

後ろからオバちゃんがラリアットをして襲い掛かってきました。

間一髪よけた理緒はオバちゃんにドロップキックで応戦しました。

の
し
ま
し
た。

そして遂に戦場で戦いました。

戦果は上場でした。

両手にこれでもかというぐらいの紙袋を持った理緒はやつと本部へと……。

【新年地獄福袋&詰め放題】

やつと本部へと……………。

「いつくわようー!」

やつと本部へと……………。

理緒は駆け出してしまいました。

夜やつと帰宅した理緒はトラックを亮介の名で引き連れて帰ってきたのです!

「まんだまだ行くわようー!」

かすかに引っかけ傷がある理緒は駆け出しました。

新年だけの特別な……………バーゲン戦場へ!

一月一日過酷戦場報告書也（後書き）

次回予告

未定

ジェイソンなつかしの部屋掃除！（前書き）

この作品はあの、ノート作品です。

登校したのは三月ですが、ノートに書いたのは二月十三日、金曜日です。

にやり。

十三日の金曜日です。

ジェイソンズデーです。

というわけで、ジェイソンのシロでのひと時をお楽しみください。

ジェイソンなつかしの部屋掃除！

ジェイソンなつかしの部屋掃除！

彼の名はジェイソン。彼は十三日の金曜日、自分の部屋を客観的に見てみました。

汚いのです。汚いのです。汚いのです。かなりを超えて、めっさ。

「これは、掃除しなきゃ。」

ジェイソンはポツリとつぶやくと、何処からか、ゴミ袋を出しました。

前に掃除したのは前回の十三日の金曜日。何年前でしようか……。本来カーペットがないその部屋は、いつからか、埃がカーペットの役をしていました。

埃を、庭で焼き払いました。部屋の高さが変わりました。次に、ガラクタです。

竜太に破壊された装備一式。

そして小さい頃の布団に、なくなっただと思っていた真剣。思い出も同時によみがえります。

そして、ジェイソンの部屋は新品同様に輝きました。

その日、存在しないシロでは、掃除ブームが始まりました。その結果輝きすぎて、存在する城へと変わってしまいました。けれどジェイソンという彼は、飽きっぽい性格でした。

三日坊主です。

再び、存在しないシロへと。

「もう、いいや。」

ジェイソンはとうとう、あきらめてしまいました。

カレンダーは再び、あの日をさして……。

ただ、チエーンソーだけはきちんと手元にあるのです。それだけでいいのです。

部屋の隅で小さくなって寝るジェイソンは、ジェイソンだけのものです。

どうなろうと、それはジェイソンが決める事。

ジェイソンだけの、シロなのですから……。

ジェイソンなつかしの部屋掃除！（後書き）

今回は、これまた三月三日前に書いた女性限定カーニバル、ひな祭りです。

まあ、女性、独りしかいませんけどねー。孤独。

孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独孤独。とにかく、次回作品、

三月三日はひな祭りでしょう？【仮】お楽しみに！

次回予告

カレンダーの日付は、三月二日をさした。

しかし、彼の女には、あるものがなかった。

ゆえに、悩んでいた。

そしてそこに現れる金持ちのぼんぼん、中片亮祐。

彼の少女、理緒は、亮祐に何をするのか！

そして、彼女の明日の祭りは！

切り裂きジャックは殺しません！外伝編第十七話

三月三日はひな祭りでしょう？

今、伝説は進化する……。

三月三日は雛祭でしょう？（前書き）

理緒、怖い。

饅頭、怖い。

お茶、怖い。

いろいろ怖い。

三月三日は雛祭でしょう？

三月三日はひな祭りでしょう？

三月二日。一人の女性は、切り裂きジャック本部エントランスホールで悩んでいた。

彼女の名前は理緒。

彼女の今のところの悩みは一つ。

明日、三月三日のひな人間の数が圧倒的に足りないのです。これはいけません。

主役は、自分に悶太。ほかの男には任せられない。亮祐は……ダメ。私が今日のことがおぼえていられなくなっちゃう。

そんなところに来た冬の虫。

「や、理緒くん。」

間が悪すぎです。けいわいです。KYです。

理緒は脱兎のごとく襲い掛かりました。

「ジャーマンスープレエエエエックス！」

金持ちのボンボンを見事ジャーマンスープレエエエエックスで捕らえました。

「ほんだら！？」

卍がためで！

「はうふうふう！いたひ、ひだい！」

そして脳天ウルトラ怪力チョップです！

「ひな人間が不足しているの。」

「あぐう！だ……だから何ナノ？あげえう！何なんでしょうか？」

そして、亮祐を立てさせてあげて。

「ドロップキイイイイイイイイイイイック！」

ドロップキイイイイイイイイイイイック！で亮祐の鼻の皮をむき

ました。

「あんにやろうん……」

情けないです。死にかけです。

「に……人間が足りないから何ナノ？ひでぶう！ぐれん！にる
ヴぁー！らがん！しゅ！」

途中の戯言は、理緒の理緒による理緒のための野望を実現させるために必要な事をさせるためのドロップキックによる悲鳴だとお考え
いただいて、なんら間違いはございません。はい。まったくもって
真剣で切りかかつてはいませんよ。決して。

「人を貸してくれ。」

亮祐は理緒の手によって縦に振られました。
気絶しているからです。

そして……。

三月三日 着物姿の理緒と、悶太がいました。ひな壇の上に。

そして五人林のBGM。

「ねね、悶太、どう？」

幼い悶太に理緒は、微笑みました。

「楽しい！」

そして、BGMがとまりました。

すると理緒がにつこり笑ったまま器用な事ににらみました。

BGM、再開です。

三人、女役で男がいました。彼らです。言わずと知れた。

「何やのん？亮祐。」

八迫は亮祐に・・・昨日の惨劇で死に掛けている亮祐に聞きました。

「何で女役なのさー。」

竜太がBGMを流しながら、泣きます。

「きょ・・・今日が、ひな祭り・・・だから。」

亮祐は倒れました。

『亮祐ー！』

竜太と八迫が亮祐に歩みましたが、お雛様が、それを制しました。

「きょーうは楽しいひな祭りーいいい！」

Vサインでカメラ目線の理緒に脱腹絶倒！

「五月蠅い・・・。」

かんざしが首のつばに刺さります。

「ああ！八迫ー！」

昇天。

明かりをつけましょ　雪洞に

お花を上げましょ　桃の花

五人林の笛太鼓

今日は楽しい

ひな祭り

来年もこの行事はあるのかしら。

三月三日は雛祭でしょう？（後書き）

次回予告

切り裂きジャックは殺しません！第一シーズンで大活躍した長谷川律子が、外伝で帰ってくる！

檻に容れられた長谷川律子。

しかし、律子は脱獄した。

一人だけの息子に会うために！

律子に子供？

しかも、その律子の子供は、まさかまさかの彼？

長谷川の知られざる新設定で出来たまったく新しい短編、脱獄しました長谷川律子！【仮】

今、伝説は進化する・・・

今月も十三日の金曜日（前書き）

ノートシリーズです。

もう19話まで書いてます。

という事は、まだまだ楽しめるんですよ。

長谷川、狭霧花、ガルガンティア、理緒、八迫、亮祐、悶太、竜太。
まだまだ書きますよ。

そして、マリーネもいたな。

まだまだこれからです。

今月も十三日の金曜日

今月も13日の金曜日

存在しないシロのジェイソンはチェーンソーを持っていました。今回は、そんなジェイソンのチェーンソーに関するお話。

今日もジェイソンは繁華街にいました。光る、チェーンソーを持って。そのチェーンソーは、血で、輝いています。

それはジェイソンの二つ目のチェーンソーでした。そのチェーンソーを錆付いて、そして、切れ味が悪いものでした。もう、人を斬ることはできなくなります。

「このチェーンソーもまた、使えない……。」
仮面を付け、その仮面もまた血で輝くジェイソンは悲しげに言いました。

「もう錆付かない、永遠のチェーンソーはないものか……。」
ジェイソンはつぶやくと、その繁華街から煙のように消えました。

13日の金曜日という本に……。
永遠に時を止めたチェーンソー13日の金曜日にのみ出現す。
13日の金曜日に13人の人間を血祭りに上げよ。呪いをかけ、わが名を呼ぶ。わが名はデス。さすれば、永遠のチェーンソー我が手を離れ、新たな主の手にささげられん。

ジェイソンは12日の木曜日にその本を見つけた。
今日で捨てようと思ったチェーンソーを手にとると、繁華街へと出

て行つた。

雨が降る繁華街。

無人の繁華街。

12人まで殺したジェイソンは、13人目が見つからず、項垂れていた。

そして、無常にも時計の針は、12を指そうと、動いた。

ジェイソンはとっさにチェーンソーで人を殺した。身近にいた人を。そして叫んだ。

「デエエツエエエエエエエツス！」

次の日からジェイソンという恐怖の殺人犯は現れなくなった。

そして、ジェイソンは・・・。

13人目、自分を殺したジェイソンの右手にはあのチェーンソーが握られていた。

そして歩いていった。

一度死んだジェイソンの命とチェーンソーの命は共有となり、ジェイソンはチェーンソーを守り、殺すと誓った。

そして自分と瓜二つのドッペルゲンガーがいるということに平田竜太という存在に気が付いてしまった。

四人の人間を集めると、対抗組織、黒の切り裂きジャックを結成。

リインカネーション

輪廻転生

ジェイソンは一度死んだため、性格、口調など、さまざまな事が変わった・・・。

今月も十三日の金曜日（後書き）

実は本編書き直して外伝編との関連性を持たせようとして本編書き直しました。アヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨヒヨ。

誰か僕に、本買ってくださいませんか？

ほしいのあるんで。

今月もまた、十三日の金曜日ですね！

次回予告

ディア博士が死んだ後、どのようにしてガルガンティアは、地球の切り裂きジャック本部へと来たのか？そのなぞが今、明かされる・・・。

切り裂きジャックは殺しません！外伝編にガルガンティア、初登場！
ガルガンティア宇宙満漂機【仮】

もしかしたら別の書くかもしれませんが。

ガルガンティア宇宙満遊機（前書き）

ガルガンティア、再来！

ガルガンティア宇宙満遊機

ガルガンティア宇宙満遊機

ディア博士が死んだ……。

ガルガンティアは自分のいるところがなくなったと思った。

ガルガンティアは、目覚める際にエヴァーニエン・サージエという大量の波動を出した。

その波動のせいで、ディア博士は死んだのだ。

ガルガンティアのいる所は無くなってしまった。

このまま、エネルギー切れで宇宙を彷徨うゴミになろう。

いつしかガルガンティアはそう考える様になった。

そしてガルガンティアは万有引力で一つの惑星にひきつけられた。大気で燃えた。

けれどそれも、ディア博士が守ってくれて、動ける。

何で？何でまだ僕は動けるの？

ガルガンティアは落ち込んだ。

僕は死ねないの？永遠に一人で永遠に寂しいの？

ガルガンティアは、目というところから機械らしからぬ涙を出した。そして、その星の住民に出会った。

ガルガンティアは、神と呼ばれた。

違う……。僕は神様じゃない。神様なら、家族を守れる。作ってくれた人を殺さない。

神様とまったく逆の固体。

しかしその住民は神と信じて疑わなかった。

「神様。私たちを助けてください。僕たちは、切り裂きジャックにぼっこんぼっこんのイヤーンにされたのです。」

その言葉でガルガンティアに搭載されたプログラムの一つが、改竄

された。

「わかった。何処にいけばいい？」

ガルガンティアは、黒い服を着て、左頬に黒子のある少年に問うた。
「地球。僕たち、黒の切り裂きジャックを痛めつけた悪い奴ら。」

ガルガンティアはすべき事を見つけられた。

「わかった。倒してくる。」

そのとき、ガルガンティアは自分というものを殺した。
自分という存在を。

「切り裂きジャック！」

そういうと空高く飛んで行き大気圏をも突破して。

しかし、切り裂きジャックの前にやるべきことを見つけた。

ディア博士の最初の依頼。殺すべき人。それを見つけたガルガンティアは、彼を殺した。

切り裂きジャック本部の前に来ていた。

ディア博士の作った正義三機体の初号機、ガルガンティアは正義の
劫火を空へ向け、放った。

そして、決戦を挑んだ。

これで、切り裂きジャックという奴らが強ければ、僕はディア博士
の元へといける……。

そう、思っ……。

「これで、奴らは死ぬぞ。」

ジェイソンは高笑いして戻っていった。

ガルガンティア宇宙満遊機（後書き）

次回予告

少女は、うどんを食べたくなった。三人の奴隷を召還して、うどんを作らせるのだ！

本格鯰鮎グルメ小説切り裂きジャックは殺しません！の外伝編に、
とうとう登場、鯰鮎王道物語

休日出勤！鯰鮎を造れ！【仮】

鯰鮎を極めし者は、わが身を極めんとす・・・。

そういえば、長谷川の話し忘れてた。

休日出勤！餛飩を造ろう（前書き）

本格餛飩王道物語小説、ここに爆誕！
見てねハート。

休日出勤！餛飩を造ろう

休日出勤！餛飩を造ろう

「餛飩食べたい……。」

理緒のその一言でその日……日曜日は竜太、八迫、亮祐にとって最悪の日曜日もとい恐怖デイとなった……。

「ねえー餛飩食べたい……。出来立てのぉー。」

会議がその日たまたまあった本部で理緒は早速発言した。

「う……。餛飩？」

何ゆえ餛飩なのだ。どこからいつて餛飩なので？

竜太の頭はクエスチョンマークで埋め尽くされた。

「じゃ、つくれば良いじゃねえか。」

八迫がつぶやく。

「回転ドロップキック！」

音速で回る理緒はそのスピードで頭に一撃加えた。アメリカで言う、チップだ。サービス料だ。

「造って……。くれる？」

うなずくしかないのだ。そんな両手を開いて、今度は高速ラリアットなんかでこられてしまつては……。

「悶太ー。モット粉練つてね。」

「竜太、踏み。モット腰を入れて強く、コシが出るように力強く！」

「その二人、出汁造れ！」

女王理緒の言葉は絶対である。

そして、三キロもの餛飩を作らされた三人はくたくたでくたくたで……。

悶太はその中に含まれてはいない。途中で、理緒サイドに引き込まれたからだ。

理緒は、悶太と二人で三キロの餛飩を間食した。もっぱら、理緒の胃袋に収まったが・・・。

爪楊枝を口に入れ、おっさんと貸した理緒は、ちゅちゅとやり、腹を抱えて次の任務を出した。

「来週は、本格釜焼きピザな・・・。」

エンドレスである！

影で見ていた亮祐お抱えの執事やらシェフやら・・・。

「お坊ちやま。この私目に頼らずともあんなにご立派に・・・。」

「ああ、亮祐様。最近このクックシェフに何も頼まない・・・頼んでくださいゃれえ」

見方もさまざまだ。

ほんかくうどんおうどんのべる
本格餛飩王道小説これにて完結！

休日出勤！餛飩を造ろう（後書き）

次回、長谷川脱獄ストーリー

でもそろそろ本編やらなきや忘れられちゃうなあ。いつそのこと
こつちを本編に改造してあつちを・・・番外編に！

脱走しましたW囚人（前書き）

これからきちんと書きます。
見捨てないで管謝意。

脱走しましたW囚人

脱走しました！長谷川律子

これが

本当の？切り裂きジャック

どんよりと曇った鼠色の空が、女性を見つめているある日、それは監獄で起こった。

監獄の中である一人の女性は、脱獄した。

あの女性だった。

「私はこんなところでいられないのよ・・・。」

そういった女性は、ふと隣の監獄を見てしまった。

見てはいけなかったのに。

その結果、隣の監獄にいた元校長の咲霧花は見捨てられた子犬の目で長谷川を見た。

「くうくん。」

しまいには泣きまねまでした。

しかし目もくれずに、長谷川は走りました。己の欲望のために。

「私はこんなところでいられないのよ・・・。」

警備員さんが襲い掛かってきました。

美形のいけてるメンズです。

「ラリッアットオオオ！」

警備員のイケメンは倒れてしまいました。

「ドロップキイイイイイック！」

次々と。

次々と。

長谷川の通った後は美形警備員の気絶体ばかりです。

そして長谷川は一本の電話を入れた。

そして長谷川は待ち合わせ場所に行った。

そして長谷川は、スーパー下克上で一人の子供を待った。

しかし待てども待てども子供は来なかった。

変わりに聞こえてきたのは、サイレンだった。

パトカーの。

警察の。

長谷川の頬を水が流れた。

空と同じ色をしている。

長谷川は自分とソラを照らし合わせた。

「手遅れ．．．．．なのね。」

長谷川は、パトカーのほうへ一人歩いていった。

パトカーの音はどんどんどんどん近づいて．．．．．。

律子の前で止まった。

パトカーは、もと来た途を進んでいく。

もう、律子は自分の子供には会えない。

「や……。」

律子は、息子の名前をつぶやいた。

もう二度と、彼には会えない。

おまけおまけおまけの出血大セールのおまけ。なんじゃそりゃ。

咲霧花を忘れてませんか？

「きやいいいん。」

律子が去った後、咲霧花は、泣いた。そして自分の能力を思い出す。

桐原と同じ力を持つ自分の力を。

簡単に言うと幽体離脱。咲霧花風にいうと霊体変化。

単に体を捨てて、宙に浮き上がるというものだ。

「霊体変化！！！！！！吃驚」

体からどんどん、魂が抜けていく。

そして一張羅の桂が。

ポロリ有りとなった。

「Oh! No! My zura! My dream is ふさふさの育毛。」

日本語訳で、まあ、どうしましょう。私の桂が。私の夢はふさふさの育毛……………かな。

そして一張羅の桂を捨ててまで、咲霧花は脱獄した。

咲霧花の心もまた、どんより鼠色に曇りまくっていた。

「わしは彼の王を再び復活うーさせるのジャー。」

三日後、やつれた魂で帰ってきた咲霧花は、体に戻ろうとしたが、自分がいた檻の中には別の囚人、6……がいた。

長谷川の元へと行くと、長谷川は執筆していた。
何かを。

「ああ。校長。貴方はたぶん霊体変化を使ったのでしょう。三日もの間で死んだと思われた貴方は肉体が焼かれてどこかをさまよっている事でしょう。そんな貴方をNovelにします。

タイトルは……。非科学のミステリー最後之血族最後之野望。よ

し。これでいい。後は、ペンネーム。長谷川律子に捻りを入れて、

ながたにしつがわ
長谷子律川これでいいわ。」

半年後、なんとそれはミリオンセラーとなった。

校長は、その半年の間に霊沸浄化を遂げた。

彼は生き続ける。
中古本屋で。

八迫もそれを読んでいた。一応全巻。
「こんな事しかできねえくせに何が・・・。」
それは紐で括られていた。

感情に浸っている八迫に、竜太がやってきた。

「ねえー。この長谷子津川ってもしかしてさあー。」

竜太が本を持ってきて入ってきた。

「ちえすとおおおおおおとおおおおおおとおおおお！」

クリティカルヒットコンボ・イン・フェイス
顔面直撃連打

綺麗に決まった。

そして更に紐で括られた本を角向きに投げつけた。

「むごおう！」

更に綺麗に決まった。

脱走しましたW囚人（後書き）

次回予告

散々個人の都合で遅れてしまった番外編。

季節感漂うかもしれない話もあったのに、書けずじまい。
仕方がない。

ここでやらねば誰がやる！

季節はずれの花見大会、一番楽しみ一文字！

怒涛痛快ドメスティックヴァイオレンスストーリー【竜太と八迫の
みたまに理緒】ただいま出撃！

6・・・と作中に出了ましたが、これはキーボードで打つと、【おほ
ほほ】になります。

暇だと思われましたね。

明日のための前夜再活動報告書（前書き）

今回はとある少年のお誕生日企画によって出来上がった物語なのだ。

放置していてもすみませんですなのだ。

明日のための前夜再活動報告書

深夜の本部に、亮祐はいた。

手にはある紙が握られていた。

背後にいる仲間たちに振り返らずに語りかける。

「俺はこれから、買出しにいってくる。頼んだぜ。明日のために」

そう言うのと紙とカード片手に本部の扉が少しずつ開かれて、閉じた。

背後にいた一人は

「これから飾り付けだな。よし、りゅーたやれ」

今では違法のサバイバルナイフを片手に持ち、竜太の首に当てた八迫はひざかつくんをして告げた。

「ふぶうう・・・」

その際、少し竜太の皮膚をめくったらしい。

「ホラ、あんたが働きなさいよ。あんた人の下で働くの好きなんですよ」

今では知っている人すら少ないメリケンサックをはめて竜太のこめかみをへこました。

「にゅうううううう」

「すいません」

亮祐は店に来ていた。こんな夜中にやっている店に。

「はいよ。何をお求めですかね」

人差し指を顎につけて首をかしげて二、三秒後、亮祐は答えた。

「ここから、ここまでかな」

さすがにお坊ちゃまは買い物の心得というものを知らない。

店長はたなこと買い占める客にびっくり、口を開いてバーコードを読んでいた。

そんなこんなで二人によるS行動により、作業はまったく持って進んでいなかった。

まったく持って進んでいなかった。

ドメスティックバイオレンス以外は。略称DVのそれ以外は。

「ただいまあ」

彼が帰ってきて吃驚した事とは訊ねられれば、こう答えるだろう。

半裸の少年R君が鎖で上から下から縛られて涎垂らしながら揺れていた所です。と絶対に。

けれど少年、亮祐は答えられなかった。

扉を開け、声が聞こえたとたん外から放送された箱の山がなだれ込んできたからだ。

その一番下で亮祐は遭難していた。

単純に言えば、遭難してた。ってこと。

箱の下で。

亮祐が帰ってきたおかげで纏まりが取れた四人は早速明日のために働いていた。

作業中、八迫は亮祐に聞いた。

「買ってきたのか？」

亮祐は作業着を羽織ながら答えた。

「うん。って言うか見たでしょ、最初に来たときに」

「遭難してたな。おもしろそうだった」

「じゃあ、今度やってみるよあ」

言った亮祐は八迫の顔を見た。

【うつわ。すんげー嫌そうな顔してる！】

「お前、遭難してたなと聞かれたら答えはひとつだろうよ……。」

【はふ？】

お坊ちゃまには答えが見当たらない。

首を傾げる亮祐に八迫が親切に角材で突き飛ばして言う。

「そこは《遭難です》だろうよお」

【心なしかなんな事で八迫は泣いてないか？】

部屋の隅に固めておいてある箱の山を見て亮祐は思わず、微笑んでしまう。

「おい、お前のかおすんげえきもちわりいゝマスクしろ。口だけ切り落としてもいいから」

八迫がマスクとメスを手のひらで渡した。

「選べ！」

にっこり笑っている。

如何しようかと亮祐が悩んでいるその隅っこで、

「はふ、竜太。もつとへやのデコレーションを完成させなさい」

デコレーションはなんだか英語風に言う理緒が格下奴隷竜太君に命令しました。

全員が一度、亮祐を見る。

「それでは各自、明日の朝までに準備を完成させよう！」

そついい終わるか否や、全員一の姿はこの部屋から飛び出していた。

もちろん一は格下奴隷竜太君だ。

果たして明日の朝、一体何があるのか。

結構時間がたってから、中央ホール内にて、

「おわったによるぺへー？」

何か言葉がおかしい。壊れているようだ亮祐八迫。

亮祐が理緒と八迫の前に物体Xを突き出す。

「途中でこれ拾った。」

縄で引きずられても平気で寝ているなぜか全裸の竜太君でした。

八迫と理緒が顔を見合わせてとつてもエグイ顔で笑った。

声をそろえて確かめ合う。

「塗り固めて首から下コンクリ。」

明日の朝は、すてきなテーブルになっているもよう。

【こちらの作法でモザイクは掛けたのですが、縄を巻くとき邪魔だったようで外されてしまいました】

明日のための前夜再活動報告書（後書き）

このお話は、ガッコウヨウソート授業用記録自家製造本に書かれていたお話で、三部作構成となっております。

次回予告

ある少年のお誕生日を祝うため、三人＋一個は動く！
あの日の活動報告記録【仮】

少年に、今まで出が一番良い思い出を。

あの日当日活動報告記録書（前書き）

生誕記念特集三部作小説第二部これより開幕です。

あの日当日活動報告記録書

まず、目が覚めた俺は、体を動かした。動かしたかったから動かしたのだけれども、動かなかった。

見ると、なぜか皆さんは横になられて睡眠中なのに、私だけが皆さんの視点よりもはるか上にあるのでございます。

そしてなぜか私に寄りかかるかのようにして栗柄八迫さんが睡眠しておられるのでございます。

けれど私に圧迫感を感じられんませんし、いかんせん、寝ぼけている頭なのでうまく働かないのです。

誰か、読者様の中にこの状況について詳しくお知りの方はいらっしやいませんかー状態なのである。

そこで私は私に寄りかかっている少年、八迫さんに聞いてみることにしたのです。

「すいませーん。八迫さん、私は一体どのような状態に置かれているのでございましょうか、その黒き宝石のような目で私を見てお教え願えませんでしょうか」

これで目が覚めるとは思わない。目が覚めたら今日は火の玉が振る。外出は控える。

理緒や亮祐ははるか遠くで寝ているのが見えている。

話かけても無駄だと思うので話しかけないことにする。

相手の寝言は聞こえてくる。

「最後の晚餐が肉まん！何たる事や！……このよのおわりじや」

理緒さんの寝言は悲しいきがする。

「……………うう……………」

亮祐さんや、体をすらしてどんな夢を見ているのですか。そんなに変な夢でもごらんになられているのでしょうか。

どちらにしても、私はここから出る事が出来ないようです。
皆さんがおきるのを体を岩石のごとく硬くして待ちましょう。

それから私の体内時計で二時間が過ぎました。

そして更に三時間が過ぎました頃でござりました。

「おおよおお」

今日の主演の一字悶太君が可愛い猫ちゃんパジャマで欠伸半分で起きて参りました。

そしてそのまま言葉をつなげて

「皆なんでこんな所で寝て・・・」

そこで悶太君は固まってしまいました。

どうやら私を見たようで、固まっております。

「なにやってるの？」

まったく持つてその通りだと自分でも自覚しているのでしゃべりました。

答えてくれないの？という顔でこちらを見つめてきます。

「見ての通り埋まっているのでございますけれどなんでかはそこら辺で寝てる人に聞いてくれる？」

「遠慮しとく」

即答されました。

そこまでのやり取りで亮祐様が目をおあけになられ体を起こしました。

「あー……。おはヨ、悶太」

それから部屋をぐるりと見てから、息を大きく大きく大きく吸って、
「おきろー全員おきろー」

私ではおきなかったのに、八迫さんがおきました。

理緒が悶太に向かつて

「ああ、おはよお」

「生誕十一周年おめでとうございますです」

八迫が焦点の合わない目でそっぴいしました。

「たすけてえー」

私はそっぴいたのですがかるうーく無視をされてしまいました。いつもの事で慣れっこのので宜しいのですが。

亮祐が悶太に、

「オリエンテーションで「オリエンテーションってなにー？」」

途中で悶太君に話の腰をゴキツと言う音ともに、折ってしまいました。

「楽しい事、かな」

理緒が年配の女性として優しく教えてあげました。

「年配……。ふうーん」

なぜかこちらを向いてにつこり笑って拳を握っておりますが。

「とにかく、オリエンテーションです。この屋敷内にある五十個のおもちゃを探してきてください」

「五十個？」

はるかに数えられる数よりも多い数字を聞いて悶太君は目を輝かせています。

「じゃあ、じゃあ、行ってくるうー」

即座に着替えて【何処から出したんだか】即座に顔を洗って【一体何処で洗ったのやら】即座に走り出して【なんか凄く早い】おもちゃ探しに出かけていきました。

「ねーこのばあいでかけるでいいのぉー」

私がしびれた顔で申しております。

が、無視なのは承知の上です。

まだまだ当日活動は続きます。

あの日当日活動報告記録書（後書き）

次回予告

少年はプレゼントを探しにはるか広い屋敷の中を縦横無尽、右往左往に駆け巡る！

なんか意味が違う気がしないでもないが。

そして少年にプレゼントを探させる間に三人釣らす一戸がする最後之費と仕上げとは一体！

活動記録報告書編三部作、いよいよ次回完結！

一文字悶太へ送る、最大最高の記念日！

あの日あの時の最高生誕記念活動報告記録書【仮】

いよいよ次かー 我らの名は、ジャクソニー。

切り裂きジャックを怨むものなり。

我らの名は、ジャクソニー。

この世の全てを怨むものなり。
我らの名は、ジャクソニー。

切り裂きジャック創設より、今このときまでに至る
復讐の準備は長かった。

しかし、これより先には延ばせない。
我ら、ジャクソニーはこれより切り裂きジャックの
本格的抹殺及び排除をはじめのものとす。

逆らうものには死を。
逆らわぬものには死を。
全てを切り捨てなげ払う。
それが我らジャクソニー。
全てのものを切り捨て、なげ払い、消滅させるもの
なり。

我らの名は、ジャクソニー。

切り裂きジャックの殺戮を繰り返し、このよ殻抹消する事を決意する、真の正義也。

我らが名を叫ぶがいい。

我らが名を刻むがいい。

我らが名を恐怖するがいい。

唯一にして絶対の我らが名は

ジャクソニー。

自由な時間を。 叛逆児（前書き）

誕生日の中編の話と話の間に一本短編を入れるってどうですかね。
なんか、楽しい気分を奪うようなそんな感じで・・・。

なんかsの本性がばれつつあるような気がする。
まあ、いいや。

この話はいつか本編【最近更新してない本編の切り裂きジャックは殺しません！】のことである】に出てくる叛逆児最終編の伏線という
か何というか。

でも、それがいつか分からないからつながるかわからん。

やばい。中途半端なことしちゃった。
しかもいつちやった・・・。
ヤヴェー！。

自由な時間を。 叛逆児

自由な時間を。 叛逆児

午後の叛逆児は、お茶を飲む。午後茶時間を楽しんでいる。
右手にカップを。左手に小麦粉クッキー練製品を持っていた。

唯一の午後の自由時間だ。

「グングニル？」

最近の右腕グングニルに右腕を突き出す。

おかわりの意味を持つ。入れると求めている。

グングニルは深い闇から手を出し、カップにお茶を注ぐと質問した。
「いつも、この紅茶が好きですね」

それに答えずにしばらく黙る叛逆児。

数分の白い時間があつた。

叛逆児はゆっくりと右腕グングニルに尋ねる。

「先代の王は殺して正解だったそうだろうか？」

グングニル 右腕は大きくうなずいて、右腕の時計を見た。

「そろそろ、始まりますが？」

「今日のメニューは何か、グングニル」

ぱらぱらとファイルをめくり、目的のページを朗読した。

「伝説の初代切り裂きジャック、シャガンの朽ち果てた肉体から出された魂と、その妻の夫婦喧嘩を」

叛逆児は屈託無く笑った。

「ソウか、夫婦喧嘩か。面白いなあ。ソウだろう、竜魂剣」

腹部に収納した業火竜に冷たい目を向け尋ねた。

「業火竜よ、これから私はコロシムでお遊戯の時間だ。お前にも遊んでもらえるのだろうか？」

「お前の言うことなんて聞いてられるか。俺をここからだせ」

叛逆児は豪火竜に苦しみを与えた。

「お前に選択権はない。有名なテレビをもして言うならば。お前には聞いてない！といったところだ」

「だま・・レ半額時」

「人の通り名を汚すのはいけないよ。竜虎路剣」
グングニル
右腕のファイルを取り、大きく罰をつける。

「今日の仕事は止め」

反逆児は王室に戻っていった。

「我が主、七の切り裂きジャック。我はいつか貴方の元へと帰ります・・・」

竜魂剣の業火竜は反逆児に融合された体で決意を決めた。

「我の名はグングニル。王に成り代わり、地上をも破壊侵略するものなり。そのためには主、貴方は邪魔になってしまいますね・・・」
グングニルが目をつぶると暗闇が広がった。

三つの意志がぶつかるのはもうすぐ。

自由な時間を。 反逆児（後書き）

次回予告

あの日最終報告書

お誕生日おめでとう！（前書き）

これにて悶太君のお誕生日企画、これにて終了。

お誕生日おめでとう！

「どこにあるのかなあ？」

悶太はあつちをうろつろこつちをうろつろして、プレゼントを探していました。

後十二個まで減らすことができました。

本部キッチンにて

「おい、チョコクリームできたのかこのアホ野郎」

「ま・・・まだですう」

八迫に迫られ、竜太は肩身小さくなった。そこに理緒がきて、
「クリームどころかチョコすらないわ」

亮祐が竜太の首をつかんだ。

「貴様はなにくつとるんじゃああ。お前、一度この世からちよこ
おつとたびに出てみるかこんにやろおおお」

そしてしゃもじでほを十発二十発・・・。

ただいまケーキのクリームと土台を製作中だった。

「プランクトン！飾の飴細工は？」

「・・・・・・自分、不器用ですか」

最後まで言い終われずに理緒はジャーマンスープレックスが竜太に
決まりました。

その瞬間、竜太はちよこつとこの世から去って、戻ってきました。

「飴細工はですねえ、こうやって作るんでございますよう」

途端に理緒はおばちゃん化して教えました。

なんと飴でアメを再現。笑いましょう。笑わなければ画面の中から
ラリアットか、ジャーマンスープレックスが飛んできます。苦笑い
じゃいけません。大声で笑わなければ。家族に不振がられるぐらい
大きな声で高らかに笑いましょう。げはげはと笑いましょう。

「あ！こんなところにもお」

悶太のプレゼント探しは順調に進んでいました。今いるところはトイレ。ほかにこの屋敷で隠すところはなかったのをごさいますようか。絶対に部屋だけでプレゼントの個数分はあると思うのですが。何でトイレなのか、なぞです。

ちなみに、このプレゼントを隠したのは平田竜太その人でした。あと、三つにまで減らしました。

「あと・・・、探してないのは・・・えつと・・・」

悶太は、かたまつてしまいました。まだ探していない部屋といえばあの部屋だからです。恐怖の部屋。P-177の部屋。悶太が恐れていたあの部屋。

「ぬ。。。うう。。。りょーすけえ・・・」

少し恨めしいです。

「きいいいいいいいいいやあああああああ」

部屋に入ったとたんに悶太の叫びがかすかに聞こえてきました。

一度部屋から出てきた悶太は竜太の汚室に行きました。

「ごーかりゅー？」

完全装備で竜太の部屋を探る悶太。竜に頼むようだった。

「いいですよ。」

「ありませんでした」

・・・。苦労して探してもらったもんだが、そんな部屋にはひとつもなかった。

どうやらきちんと配慮してあるようだった。

そのころ、キッチンでは用意は終盤に差し掛かっていました。

「おい、そこ、テーブルに敷いて料理を運んでこい。それから真ん中にはケーキを飾るのである」

亮祐が若干マダム風に指揮を取る。

若干悶太にお熱のようだ。

これはとても危ないことになりそうで怖いです。
そうなったとき、この哀れな私にその線を引くことができるので、
ざいましょうか。

「これで、準備完了だ!!!」

と、亮祐がいったとたんに扉が開きました。

亮祐、理緒、八迫それから竜太の四人は声をそろえて言いました。

「一文字悶太君、お誕生日、おめでとう！」

パーティーはこれから始まります。

お誕生日おめでとう！（後書き）

やっと終わりました。本当に長期放置していて申し訳ありませんでした。

次回からもきつと長期放置になるでしょうが、お許してください。

待っていてくれた皆様方、本当にありがとうございました。虫のいい話ではありますが、次回も、待っていてくれるとうれしいです。待たせないようにはいたしますので。

白い壊し屋？ TWO（前書き）

こんな話もどうですか？

ってか、悶太君ってこんなこと考えてたんですね・・・。

ちなみにいつもはなしは大体大筋しか決めてなくて、その場その場で考えているといっても過言ではありませんので。

デモですね。たとえばいうなれば、ガルガンティアの話を一例にすると、

- 1 変身不可能になる 負ける。ガルガンティア棺を出す。
- 2 竜太は別界死者の門よりそれ以外は棺で宙ぶらりん
- 3 死者の面から出た竜太のジャックに変化が 使うと死者の面
- 4 棺破壊、ガルガンティア自爆宣言
- 5 デイア博士が残したメッセージ

エヴァーニエン・サージエ、大量のハドー。

ってな具合です。

でも、この話だけが番号ついてるので別の話でも一例、たとえばメリアーサ篇の。

空機より殺意をこめて・・・編

トルキシアと名乗る空軍の戦闘機が本部に銃撃。それはロボットへと姿を変える。

それは無人口ロボット、デイア博士の二号機、メリアーサだった。本部で寝込んでいる悶太を守りから撃破しろ！

ってな具合です。

でもこちらの話は短かったので。

長いので言うと、構想中の業火の霊 イキヤバラ教編ですかね。

これ書きちゃうと長いんですよ。アイテム何個が出てきてそれを回収、もしくは破壊しながら話を進める・・・ってな感じのもんですかね。めっちゃくちゃ長くなると思います。

けれどそこまで書く度胸がないので省略はされるでしょうが・・・。
なんか悔しいですね・・・。
ではこんなんです！

白い壊し屋？ TWO

彼らが動き出したのは暗い日だった。

その日の月は薄暗く輝き、これからのことを知っているかのようにだった。

しかし、それを月は誰にも教えない。

他人の不幸は蜜の味という言葉があるように、月のモットーはこれだからだ。

そんなある日、奴等は動き出した。

作戦を実行するべく。夜行性の彼らは赤い目をぎらぎらと光らせて動き出したのだ。

そんな彼らは薄い光の中、確かににやりと笑った。

これから起こることを思考したからだろう。

それほどに、自身のある作戦なら・・・。

それはおそらく突然の史上最強最小の侵略といっても過言ではなかった。

彼らは白い壊し屋という軍団だった。

小さく小さく、そして破壊行為絶対の侵略が今、始まるうとしていた。

その日、彼らの手によって・・・。

その侵略は次の朝に、竜太の叫びによって全員に晒されることとなった。

彼らが起こしたその侵略を。

竜太の部屋にあるものはすべて形を崩されており、全てが何者かに削られた、もしくは齧られたと見られる傷跡が……。

竜太の集めていた深夜アニメのそういうもののフィギュアや、そういうものの本などが。

悶太は、気がついてしまった。

聞いてしまった、見てしまった。

何かが笑ったその声を。

そしてその何かが目を過ぎったのを。

犯人は奴等であると、悶太にはわかった。

そして、今の自分では決して敵う筈も無いであろうということも……。

皆に伝えようと思って踏みとどまった。

歯がゆい……。

いつもいつも荷物になってばかりだ……。

誰からも頼りにならない。

それでは、僕が切り裂きジャックである意味がない……。

僕が、みんなの力になりたい。

少年を動かしたのはそんな簡単な思いだった。

龍魂剣の豪火竜についてきてもらえばいいだろう。

幸い、八迫が先日ミクロンジュースを完成させた。

その便を数本搔つ攪うとそのうちの一本を自分に、そして一本を豪火竜に飲んでついてきてもらい……。

『これで本当に、主は救われるのですね・・・』

豪火竜は怪しげに悶太に訊ねる。

「そうだよ。竜太が大事にしたたあんな物や、こんな物を壊されているんだよ。だからね。それに」

悶太は一度言葉を区切ってから言葉をつなぐ。

「これは僕が切り裂きジャックとして認めてもらえる大事な試練なんだ」

いつの間にか悶太は手に力を入れて力説していた。

それほどまでに自分に自信がなく、認めてほしいと思っていたのだ。

そして程なく、二人は小さい穴へと、入っていった。

そこは、暗く、暗く果てしなく続く彼らの魔窟であることに、二人はやがて恐怖する。

「侵入者が来た。おそらくは、我等の支配下になるであろう者どもからの刺客であるといいだろう。見つけ次第、即刻殺してしまえ。わかったな。ニルヴァーナ。主だけが、我等の城を作る武器と

なれる」

黒い部屋の中で、赤い目が光り眩いていた。

そして、何もなかったところに新しく赤い目が増えた。

「わかりました。父上。わたしが父上のための手足となるべく、働いてまいります」

目が、二つに戻りやがてその目も消え、その場所は暗く暗黒が場を制した。

白い壊し屋？ TWO（後書き）

次回、悶太と豪火竜に迫るニルヴァーナ。

ニルヴァーナとはいったい何なのか！？

そして、彼らの正体は？

悶太は一人前の切り裂きジャックとして認めてもらえるのか？

意外なところから侵略キタアーーーーーな白い壊しや編第二作、お楽しみにしていただけるとうれしいでございます。

？
FREE（前書き）

ニルヴァーナって何なんでしょうねえ！。

たぶんそれがあると力が強くなるよー的なズル技のアイテム形だと思われます。

これ終わったら豪火竜のお話でも書こうかなあー

ちなみにですよ、豪火竜と龍魂剣の龍と竜の字でなかなか変換しづらいと試行錯誤しております。

豪火竜の話で本当の名前が明らかになってそれでそっちでこれから呼ぶことにしようかな、それがいいと思いませんか。

? FREE

「お前が、父上の邪魔をする者か。父上の夢のためには、いてもらっては困るんだ。父上の夢、我らが存続のための場所。根城。そのためにはワタシ、ニルヴァーナがお前たちを止めなくてはいけない」いきなり二人の前に現れた黒いそれは、いきなり叫んだ。

「ニルヴァ・・・ナ・・・？」

豪火竜は何か思い出そうと考えている。

「そんなことより、こいつを何とかしなくちゃ、僕たちはここに駆除剤負けないんだってばあ」

悶太は両手をばたばたしながら豪火竜にすぎる。

そんな悶太を豪火竜は一括する。

「自分が認められたいのなら、まずは自分だけで行動することだ・・・」

今まで仲良しだと思ってた豪火竜にいきなり一礼入れられてビックリする悶太。

「こいつの相手は私がします。今のうちに奥にいるはずの王座に仕掛けてきなさい！」

悶太は腹を決めた。

「いきます！」

悶太は、羅列も回らぬように急いで走って行った。

その姿を見ているだけのニルヴァーナ。

しばらくの間があつてやつと口を開いたのはニルヴァーナだった。

「あの小僧に、ワタシの父上の邪魔をさせる気なのか？」

静かな口調だったが、その目には憎しみが宿っていた。

「ワタシの願い《ウィッシュ》は、父上の力となり、こき使ってもらい・・・」

豪火竜の背後に回りこみ、ニルヴァーナは言葉を続ける。

「父上の我侭まで私の命を使い果たしてもらうこと。そのためには、お前と小僧を消す必要がある。しんでくれ」

ニルヴァーナが爪を鋭く伸ばし、豪火竜の首を狩る。

「火炎の咆哮！」

豪火竜もそれに咆哮で応戦し距離を置く。

「ニルヴァーナ……。お前は、アレの生き残りなのか？」

その言葉を聞いてニルヴァーナは一瞬動きを止める。

「お前はどこまで知っているのだ……。ニルヴァーナについて」

豪火竜が勝ち誇った笑みで答える。

「最初から、最後まで」

その言葉を聴いた途端にニルヴァーナが血相変えて襲い掛かる。

「鋼鉄の手爪！」

「爆炎の手爪！」

鉄の爪と炎の爪がぶつかり、暗いその場所に火花が散る。

「鋼鉄の！」

「尾激！」

「爆炎の！」

互いの尻尾がぶつかり合い、激しい風圧が当たりに散らばる。やがて、豪火竜の一撃によりニルヴァーナは膝をついた。

「貴様、いい加減ニルヴァーナのことを吐け！」

息切れしてきたニルヴァーナは豪火竜に叫び、地面をたたく。

「ニルヴァーナ……。か。ニルヴァーナも知らん者がそれを手中に収め、使いこなせもしないのに其れで王様気取り……。」

豪火竜はニルヴァーナの顔をに爪を突きつけ、

「今すぐ、ニルヴァーナをだせ。お前のニルヴァーナさえあれば、私が奴に戻る必要性などないのだ。ニルヴァーナがあれば、私は帰らなくていい」

言葉を確かめるように一言一言正確に話す。

「お前のニルヴァーナひとつで私はあの暖かい場所にいることが出来る。寒く暗く呪い渦巻く場所に行く必要性などなくなるのだからさあ、ニルヴァーナ……。今すぐニルヴァーナを出せ」

ニルヴァーナは、その言葉を聴き笑い出す。

「俺のニルヴァーナは俺のもんだ。父上から授かった俺のニルヴァーナだ。貴様に渡すぐらいなら、お前も道連れにしてやんよ。鋼鉄の粉塵！」

すべてを理解したニルヴァーナは自らの命と代償に相手を道連れにした。

「爆炎の翼風！」

豪火竜が自らの翼で来るものすべてを弾き返していた。

「私は、主を守るんだ！」

しばらく、明るくなったあとに再びあたりは暗くなり、物音ひとつしなくなる。

時たま、荒い息遣いが聞こえるだけ。

「悶……太」

？
FREE（後書き）

次ぐらいで終わるとうれしい。

なかなか短編とか中篇のほうが性にあってるよなあーとか思います。

長編はなかなか話が進まないのに短編中篇だとすらすらって訳じゃないけどそこそこの速度で書きちゃう奴。

クラスに一人や二人いたでしょ？

あれ、おいらだけですか・・・。

? DRAGON(前書き)

一気にこうやって書いていると話のつながりがわかりやすくなって
言いのですが、頭がごちゃごちゃになってしまいうまいことまとま
りません。

しばらく時間を置いてから見直して出せばよかったですね。なんて
思ったりしちやったりして。

DRAGON

また、あの声^{こゑ}が来る。

あの怖くてどうしよもなくなるような声がまた、響いてくる……。

あの声……。

「はあ、はあはあ、ふう……はあ……」

暗い中、悶太は走っていた。

とまっ
ては
い
け
な
い。

殺されるから。

この作戦は失敗してしまった。

仕掛けるわなを壊されてしまったから。

彼にまったく歯が立たなかった。

結局僕はまた誰の役にも立つことはできないのか……。

悶太は一人走りながら自分にあきれ果てていた。

仲間のために、認めてもらおうとここまでしているのに、また結局

は守ってもらっただけのお荷物……。

一人では何も出来ないのかと。

僕は、駄目なのか……。

そう思って走っていたとき、何かにぶつかってしまった。弾力のある

る、何かにぶつかった。

そして、あの声が響いてくる。

「うぬはもう駄目である。ここで諦め、私の中に取り込まれるがい

61

「ああああああ ああああああ ああああああ ああああああ」

あの声が来た。

嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ嫌だ

「うぬは諦め、おわるべき運命なんだ・・・」

トラベラーを構えようとして腰に手を伸ばすが、トラベラーを手に取る事なく腰を通過する。

「うぬが探しているのはこちらの子供じみた玩具かな？」

手の中でボキボキと音を立てて捻じ曲がり、パラパラと音を立てて割れ始め、トラベラーではなくなっていた。

「それを・・・、かえせ・・・」

それは亮祐がくれたものだから。

始めて亮祐がくれたものだから。

初めて認めてくれた、物だから。

・・・！！

初めて認めてくれた物。

認められてたんだ。

もうとつくに。

無理して入れてもらおうとしないで、今まで道理の僕で居て、今まで道理の家族みたいに居ればいいんだ。

そう思ったら、なぜか力がわいた気がした。

もう、認めてもらえていたって知ったから。

もう、無理しなくていいとわかったから。

「お前にトラベラーは壊せない。絶対に。僕が無理していたのが判つて、もう無理しなくていいとわかったから。何度壊されても、僕はお前に負けない」
決心がついた。

もう、僕は弱くなんかないから。

「トラベラー！」

叫んでみたら、手の中には壊れていたトラベラーが元通りに、違う、スケールアップして戻ってきてくれた。

「トラベラー！」

もつと、

「トラベラー！――！」

こんなのが限界じゃない。突破して、もつともつと限界なんか超えて……。

「トラベラー」

「ぬしが我に勝てることなど、どんな事情があろうともそれは覆ることはない。わが名はジャンニエル。

城を壊し、黒を導く者。そして、侵略者を許さぬ絶対の者」

ジャンニエルが手に持っていた杖を悶太に突きつけて叫ぶ

「黒影の舞、影人形」

杖から黒い影がいくつもいくつも出てきて、悶太を取り囲む。

「僕は、負けることない。わかったから」

悶太が大きく息を吸い、トラベラーを構える。

「トラベラー、影縫い！」

トラベラーからいくつもの光が出て、人形を一体一体貫き、消していく。

「俺は、お前に負けたりしないんだあ！乱射光弾聖一矢」

トラベラーから出た光が、周りを明るく照らした。

そしてそこに浮かび上がったジャンニエルの姿は鼠だった。

「私は決して侵略を止めない！これからここで、ニルヴァーナと新しい城を作り上げるのだ」

光が、貫いた。

「ニルヴァーナ。私とお前の新しい城は、そちらにあるということか……。お前はもう、そこで新しい城を作っているのか？」

それが、ジャンニエルの最後の言葉となって……。

「これで、駆除完了したのかな？」

悶太は首をかしげた。

悶太が出て行ったあと、そこには仲間が居た。

「ありがとな。悶太」

八迫と亮祐が頭をなでてくれて、

「すごいわよ、悶太」

理緒があめを箱で渡して、

「ありがと・・・悶太」

竜太が半ベそでお礼を言う。

もう大丈夫。僕はきちんと輪に入っていける。

「ニルヴァーナ・・・。奴が、ニルヴァーナを・・・」
豪火竜がそれからしばらく、ニルヴァーナについて、ずっと調べていた・・・。

? DRAGON(後書き)

これで、豪火竜の話に移ろうかと思ひます。
以上！

古龍豪火竜（前書き）

で。

古龍豪火竜

山の奥底にそれは存在していた。

何者も来ないような岩山の奥底でそれは存在していた。

何も知らぬ、そしてこれから何も知ること無いまま終わっていく命が其処にはあったはずだった。

彼が呼び起こすまでは。

何ゆえ彼は力を欲したのか。

何ゆえ彼は力を見つけたのか。

それは現代に至るまで解明されていない。

現代の彼らの書物の中にも彼に関するものだけは全て失われていた。

それは誰かの思惑によるものか、自然にか。

只の一冊だけを除いて。

彼のことは何一つ解明されてはいない。

彼は何かに敗れてそれを打ち倒すべく力を求めたと、書かれていた。

その一冊に乗っているのは彼とその龍についての話。

彼は切り裂きジャック。

龍は豪火竜。

切り裂きジャックは何ゆえか、力を求めた。

各自、自由気ままに休暇をとれ！？（前書き）

豪火竜のお話が止まっていますね。

それなのにこれを送ってしまいましたね。

大変ですね。

豪火竜の話は延期、ということでしょうかね。

大変申し訳ありませんです。

はい。

ちなみに本編で一週間の休暇編始動とかほざいて石版の話に入ってしまった埋め合わせ的物と考えてくだされば結構です。
時間軸はそこらへんです。

本編には入れられないなあと思ひまして。

こちらの身勝手な理由ですが。

ちなみに今シリーズは久々にノートを引っ張り出してそこに下書きしてからという懐かしい方法をとらせていただきました。

きちんと完結はしておりますので時間さえあればすぐにでも完結することが出来ますね。

という長ったらしい前置きは置いておいてはじめまひよ

各自、自由気ままに休暇をとれ！？

ある日、切り裂きジャック本部内ではある計画が練られていた。それは連日のごたごたの疲労をいつまでも引きずってはいけな
いと言う思案から元に出された計画だった。

各自に一日の自由な休暇を取らせようということになったのだ。

紋太は亮祐ととある場所に出かけ、

理緒はとある人物と出かけ、

八迫はとある物をてに入れに外出、

竜太はとある再試を受けに休日登校。

という各自の充実した休日を過ごすことを許されたのだった。

そして、休日は思いもよらぬ形で各人らを攻めてくるのだった。

各自、自由気ままに休暇をとれ！？（後書き）

これより、各人の休暇内容を発表してもらいます。
それでは一番手、亮祐君と紋太君。

絶叫回避！！！！（前書き）

各自自由な休暇を提出した切り裂きジャック御一行の休日報告！！！！

絶叫回避！！！！

彼は今、自らの生命の終わりが今ではないか？と実感していた。

実際にこれまでの少ない人生で体験していた出来事が浮かんでは消えて、浮かんでは消えていくからだ。

その理由は彼の目前にあった。

巨大な機械。それは一周してもとの場所に戻ってくる。ゆっくりと回転して、元の場所へと戻ってくる。

それは彼が今いるここには必ずと言っていいほどの確率であるものだった。

そして彼の周りには子連れの家族や、出来たてだかなんだかのカップル。誰一人としてその場に一人でいるものはいなかった。かくいう彼も一人ではなかった。

「ねえー！亮祐！！次、次アレのるっ」

彼、亮祐は目線を下げ、下を向く。そこにいるのは自分の家族。一文字紋太だった。

今、中片亮祐と一文字紋太は人生初の遊園地に来ていた。

すでに、お化け屋敷やメリーゴーランドなどのマイナーな乗り物は全て乗った。

そして日も暮れ終わりが近づき最後となった乗り物、観覧車の前で

亮祐は先ほどから立ちすくんでいた。

ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイイイ！！！！

亮祐の脳内サイレンが鳴り響く。

と言うか響き渡りまくっている。

高いの無理高いの無理高いの無理高いの無理いい……。

亮祐はそんなことで脳の大半を埋め尽くしつつことの発端を思い出していた。

アレは数日前の昼ごろのことだった。

突然理緒が叫びながら駆け込んできたのだった。

「当たった当たった当たったのよおお！！マジで」

その台詞に食いついたのが厄介ごと大好きなサディスティックフレンド八迫だった。

「あにが??」

そう聞いたのをとめていればよかったのかもしれない。けれどすでに時は遅く、それが遊園地のチケットであること、それがペア招待券であることが判明し、さらに誰が行くかとの発展でとどめとなつたのが紋太の一言、

「遊園地って何？」
だった。

紋太にしてみれば、ただの知らない単語を聞き、それを知りたいと言う好奇心から来た言葉だろうが、それを聞いてしまったほかの皆様からの視線は痛かった。

「お前今まで一度も連れて行ってやらなかったのかよ」

「金持ちの癖にそんな程度の娯楽すら味わったことないの？」

それを必死に連れて行きませんでしたと訴えたのも、過去のことであり、それを聞いた理緒が哀れみの眼差しで亮祐にチケットを渡し、「ここに・・・います・・・」
思わずつぶやいてしまう。

きつと八迫は自分が高所恐怖症であることを知ってでの発言だろうし、これは嫌がらせに他ならない！！

単に紋太を遊園地に連れて行かなかったのではない。

連れて行けなかったのだ。連れて行ってやりたい気持ちはあったが、子供は観覧車が、好きという統計アンケート【2009年版】を見

てしまっただけからは到底言い出せなくなってしまうて・・・。

「ねえ、行かないの？」

紋太のまぢきれずわくわくの目でそう尋ねられると帰ろうとはとてもいえずに、亮祐はついに観覧車の列に並んでしまった。

これは、どんな敵よりも今迄で一番手ごわい・・・。

亮祐は自分の恐怖心と戦いながらそう思った。

絶叫回避！！！！（後書き）

次回 少女と少年【仮】

死すら覚悟！！！本気の死闘 - 序章編 -

悠里の目の前で、理緒が倒れた。再び立ち上がろうとするがそれすらも許されない。

それを見て悠里は今自分が何処にいるかを改めて実感してしまった。思わず足が動いて助けに行こうとしてしまう。しかし、今の自分では逆に足手まといになってしまう。道は開くことが出来る。けれどもそのあとが問題だ。今の自分の眼力では見極めることなど出来ない……。

それに今、自分に課せられて指名がある今、ここを動くことすら許されない。

だから……だから今の自分に出来るのは、自分の使命を全うし、自らの妹、理緒を信じることだけだった。

そもそもの始まりは、今朝の一撃から始まったことだった。

それは早朝の五時に遡る。

悠里はそのとき、暖かい毛布の中でぬくぬくと睡眠をとっていた。

悠里はその日の遅くまでひたすらパソコンの中で戦っていた。

何と。とは言わないが必死に戦っていた。それからの睡眠だったため、有利の睡眠は浅かった。

だから、今起こされると非常に本日に差し支える。

そこに、理緒の本気のドロップキックが高速で飛んできたとき、避けられずベッドから、暖かい聖地からの追放を受けたのだった。

悠里は寝ぼけた眼で今まで自分が幸せに浸っていた場所に立っている妹をにらんだ。

と告げた。

結局朝の五時に起こされたというのに家を出たのは七時半となってしまうた。

朝のあの無駄な目覚ましが必要ならばあと一時間は確実にぬくぬくとでいたというのに。

悠里と理緒は死闘の渦に巻き込まれ始めていた。

汝は何を買い求めるか

『切れのある深い味わいNEWブレンドコーヒーアダマントイト！新発売っ！！！！！！』

『ミルクのこくUP！！ さらに加わるマジカルなカロリーオフの味！カロリーアーヌ』

そのCMを見たのは今朝だった。

今朝、ソファでテレビを眺めていたときだった。新製品と聞けば食いつく八迫にとってそれは聞き捨てならないCMだった。それを見た瞬間、一日中家にいるつもりだった思考が一瞬にして切り替えられる。

これを買うに行くという思考に。

そして至る現在、八迫は悩んでいた。

目前にある缶コーヒー、アダマントイトとカフェオーレのカロリーアーヌ。どちらも今朝宣伝されていた、そして八迫が気になっている二つの飲み物だ。

どちらもほしい。だが今現在持ってきている財布に入っている硬貨は三桁の一番小さい額、一枚のみだ。

先刻本屋にぶらりと立ち寄り馬鹿の様に大人買いして待ったつげが回ってくる。それを理解すると今自分の両手に下がっている重りが鬱陶しく見えてきてしまっただろうもない。さらにそれを理解したことによって手がしびれてきてしまった。

目の前にあるのは自らが求めていた二つの飲料。

どーする、どーするよ！俺！状態なのだ。

ふと八迫の目の端に軍隊のように押し寄せてくる主婦の集団を見つ

けてしまった。何と八迫はすでにここで二時間半ほど立ちすくんでいたのだった。そして、今の時間はちょうど主婦達の狙いの時間らしく、新製品好きの主婦の手によって一本、一本と減っていく。

八迫には解っていた。

このままでは・・・このまま悩み続けていてもどちらも買うことができなくなってしまうということに。

必ず自分には一本も手に入ることがないだろうということも。

八迫はついに決心した。そして一本のカフェオーレ、カロリーアヌに手を伸ばした。

「ああ、これで一本、俺の手に入る・・・」

そう思いながら、手を伸ばした八迫の手が空をつかむ。

それどころか、箱自体の存在が消失していた。主婦の一人が、箱買いをしたらしい。

しかたない。と空をつかんだ手を反対の缶コーヒー、アダマンタイトに手を伸ばす。

伸ばそうとしたのだが背後から鋭い殺気がその空間を支配した。そしてその殺気で一瞬油断したことが命取りとなった。

八迫の背後から殺気を放ち時間を支配した主婦がアダマンタイを買い占めて消えていった。

こうして新商品と八迫の戦いは白く固まった石膏像のような物体を作り、終わった・・・。

そして、動けるようになった八迫の前に残されているのはアダマンタイトと、カロリーアヌの値札。そしてかさ上げのための空箱。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7964e/>

切り裂きジャックは殺しません!裏面?

2010年12月13日01時24分発行